

---

## 第2話

手乗りタイガー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

第2話

### 【Zマーク】

N2909M

### 【作者名】

手乗りタイガー

### 【あらすじ】

運命の赤いとんかつ 前編 の続きです

運命の赤いじんかつの?ー【後編】

【夜8時】

ガチャ

大河がやつて來た。

「よつ」

軽く挨拶をしてみる

「……」

もぢりん無反応。

カチ……カチ……カチ……。

時計の秒針の音が

沈黙に拍車をかける。

何時間たつただろうか

いや、実際には2分くらいしか  
経っていないんだろうけど、

この2分は1時間にも2時間にも感じられた。

「…な、なあ大河、とんか」

「別れよう」

「……つー」

先に口を開いたのは俺だった……  
しかしそれを征するかのように  
大河が別れの言葉を口にした。

「！大河…つ…！何言って…」

「ばいばい……」

そう言つて大河は部屋から出ていった……。本当は引き留めた  
かった……でも、突然のことすぎて脳も体も動かなかつた……

まだ……また  
あいつを1人にしちました。  
ずっと一緒にいたのに……  
気づいてやれなかつた

聖夜祭の時に……  
修学旅行の時に……  
もう絶対、  
大河を1人にさせないつて  
決めたのに……。

くそつ……ー！

今度掴んだら、もう絶対離してやんないからなー！

「……っ！」

俺は走つて家を出た。

（大河日線）

（2月24日）

今日は竜児と2人で近くのスーパーまで買い物にきている。

そして今、

私はトイレの個室で  
1人うかれている

『竜児と買い物かあ。  
なんか…デートみたい  
：それにここに来る途中、  
私のこと…か、可愛いって言ってくれたし…  
あの時は恥ずかしくて  
目潰ししちやつたけど、  
本当はとっても嬉しかった。本当、竜児に出来てよかったです  
ありがとうね、竜児』

すると突然、トイレの  
ドアが荒々しく開いた。

私は1人、のろけていたので  
びっくりした。そしてその足音は私の隣の個室へ入つていく。

「…高須…君つ

やつぱり私、無理だよ。」

『…みのりん！？泣いてる？？』

「大河とのこと、…応援…してゐる…はずなのに、応援するつて、  
決めたのに…私…やつぱり…高須君が…好きだよ！」

「…つ…！」

『私、なに浮かれてるんだ…

親友のみのりんが…大好きなみのりんが、こんなに苦しんでるのに  
…つ

私なんかが、竜児と幸せになつていいいの？？

私一人だけ、いい思いをしてていいの？』

気づけば私はトイレを飛び出しだしてた。その刹那、トイレの前で  
誰かとぶつかつたけどそんなのどうでもいい。

あいつは何も知らないから、  
当たり前なんだけど、私がトイレから帰つて来た後も、あいつは…  
竜児はいつも通りに接してきた。それがなんだか嬉しかったようであ  
切なかつた

（2月27日）

【学校帰り】

私はあの日から3日間、竜児と別れるべきなのかずっと悩んでた……。

そのせいで、竜児にどう接すればいいのか分からなくて……この3日、竜児のこと

ずっと無視してた……。

そして今日、竜児に家に来いって言われた……。

きっと愛想尽かしちゃつたんだろうな。

わがままで、暴力的で、ドジな私なんかに。

……だったら丁度いいや。

ふられるくらいなら、

私から……別れを告げよう

【夜10時】

私はいつかの橋で独り泣いていた

これでいいんだ……これで……

竜児もそれを望んでいただろ？し。私の事なんか……もう嫌いになつちゃつたはず……。

（竜児目線）

（2月27日）

【夜8時半】

「大河――――いるなら返事しろお――」

俺は独り、暗闇の中で大河を探している。大河は家にはいかなかつた。つまり、外にいるということだ。

「こんな寒いの」……風邪引いたらどうするんだよー

「あ～～り、高須君、  
何してるの？」

「えつ？！」

突然声をかけられた

「川島？」

そしてそこには、クラスメートの川島亜美だった。

「そ、そっちは… こんな時間に何してんだよ？？」

「亜美ちゃんは～高須君に会いに来たんだよ」

「なつ～からかうために来たなら帰ってくれー今、忙しいんだ」

「何よお？？その言いぐさは？

せっかくタイガーの様子がおかしい理由を教えてあげようと思つた  
のに。」

「な、何か知つてるのかー？」

「まあね…。亜美ちゃん、3日前にスーパーに買い物に行つたのよ  
…それでちょっとトイレに行つたら… 中からみのりちゃんの泣き  
声が聞こえてね… その… 高須君のことがやつぱり好きだつて…  
タイガーとのこと応援してるけど、私もやつぱり高須君が好きなの  
つて言つて… そしたら急にドアが開いて、タイガーが飛び出しつれて… タイガーも泣いて… タイガーは私には気づいて

なくて、相当ショックだつたんだと思つ。もちろんみのりちゃんは私にもタイガーにも気づいてない……。

「それで大河の様子がおかしかったのか…………。俺と別れようとしたのも、櫛枝のため…………。」

「わつ言つことだよ、高須君……」

俺の言葉に返事をしたのは川島ではなかつた。

「く、櫛枝！？」

「『めんね…高須君。私、高須君から聞いてたから大河がトイレにいることは知つてたのに…。そんなことすら忘れちゃつてて…本当にめん！』

「なんで櫛枝が謝るんだよ！櫛枝は何にも悪くない…いや、誰も悪くなんかないんだよ！だから…わつ謝るなよ」

そう言つた後、櫛枝に一歩近づく。

「来ちやダメ！」

「…」

「それ以上、近づいちゃだめ！  
高須君は…大河の所へ行つて！」

「……え…でも……」

「いいからーー！」

“お前の気持ちはどうなるんだよ？？”

そう続けようとした俺を  
櫛枝が征した。

「……っーー！」

「高須君なら……きっと、大河がどこにいるのか分かるはず。どんな暗闇でも、どんな逆境でも、誰より先に！大河を探し出して…見つけてあげられるはず。高須君じやなきやダメなんだよ！」

『……ごめん、櫛枝！』

その言葉は敢えて口には出さず、俺はその場を走り去る。

『バレンタインデーの時もだつた川島に…北村に…櫛枝に…  
背中を押されて、俺はよつやく

自分のやりべきことに気がつく。俺は…本当に大バカ野郎だ！』

「待つてろよ、大河！…絶対、お前を見つけてやる」

『大河が行きそうな所…！橋だ！2人で告白した、あの橋だ！』

「よかつたの？高須君のこと、行かせちゃって…」

「し、仕方ないよ…2人は…2人は…つ…！」

「別に無理して言わなくていいわよ。」

「あーみん…ありがと。」

【夜10時15分】

「はあ……はあ、着いた」

そこには、体育座りで膝を抱えて真っ赤に腫らした目をしながら、尚も泣いている…

“あいつ”がいた。

「……竜児……竜児、ごめん、ごめんね……」

俺の姿に未だ気づいてない“あいつ”を俺は後ろから優しく抱き寄せる。

「ばーか。……もう泣くんじゃねえよ…………大河。」

「……えつー？りゅ、竜児！？な、なんでここに……」

俺は立ち上がり、  
まだ座っている大河の両肩を  
優しく掴んで立たせる。

「話は全部聞いた。お前は悪くない……。だからもうあんなこと言うなよ。お前のためにも…………櫛枝のためにも」「

「……つー……で、でも竜児は私と別れ話をするために家に呼んだんじや……。」

「そんな訳ねえだろ！俺はただ……お前が……大河が元気がなかつたから……その……あの日食えなかつたとんかつを食べて元気づけようと思つたんだ。」

「……竜児……。」

「でも……やつぱり……」

「俺達が別れたら、身を引いてくれた櫛枝の気持ちはどうなるんだよ……」

「……つ……」

「実は3日前、俺も櫛枝に会った、その時に言われたよ、大河を泣かせちゃダメだよつて……。それが櫛枝の覚悟だ！その気持ちを無駄にしないためにも！俺達は幸せにならなきやいけないんだ！」

「りゅ……つ……じ……竜……児……竜児！」

大河は何かが吹っ切れたように俺に抱き着いてきた。

帰り道、大河は突然、何かを思い出したように言った

「ていうか、なんであなたが女子トイレであること知つてたのよ？聞いたって言ってたけど……まさかあんた、私の後をつけて、女子トイレまで来てたんじゃないでしょうね？！」

「んなつ……！そんな訳ねえだろ！！川島から聞いたんだよ！」

「バカチーから？！なんでバカチーが知つてるのよ…？」

大河はさつときとはうつて変わつて俄然、元気だ。

「川島はトイレの外でずつと話を聞いてたんだよ。お前がトイレから飛び出した時にぶつかつた人も川島だ。」

大河は急に恥ずかしそうな顔をする。

「ていうことは……私、バカチーに泣き顔見られたの？！……最悪……。どうしてくれるのよ！？」

「なんで

俺のせいになるんだよ？！」

「まったく……許して上げるから早く行くわよ、グズ犬。」

「グズ犬って……つて言つて行くつてどこの？？」

「あ、あんたの……竜児の家に決まつるでしょーーー！一緒にとんかつ食べるんじやなかつたの！？」

「...え? ?!」

「……は、早く行くわよ。

あ……べ、別に私があんたと一緒にいたいとか、

たたた、ただあんたが

一緒にいたいなら一緒にいてあげてもいいって言うか//  
で、でも別に私も一緒にいたくないとかではないって言うか//  
その//ゴニヨゴニヨ//

大河は恥ずかしそうにしながら俯いている。しかも顔は真っ赤だ。

「大河」。

もし……俺がお前と出合ってなかつたら、  
なんて考へられないし、  
考えたくもない。

だつて、

お前が…俺のすべてだから。

「な、何よ？！／＼

「あれや……ありがとな」

「なつー何よ急にーー本当……竜胆はずるいのよ……。」

「ん？？なんか言ったか？？」

「なななんでもないーーなんにも言ってないーー」

「わかったわかった。

……だから早く行くぞ。それにこんな所にずっといたら風邪引くしな

「う、うん／＼

……大河の顔は真っ赤だ…………しかし、2人の手と手は今も、  
しつかり繋がれている。……ちょいと、あの時のように。

## 運命の赤いとんかつ?-「後編」（後書き）

駄文でしたが最後まで読んでくれてありがとうございました。  
これからも第3話からを連載していきたいと思います。

でわっ！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2909m/>

---

第2話

2010年10月13日15時42分発行